

## 『外国人にルーツを持つ子どもへの日本語指導者養成講座 Part11』 記録

日 時 2018年(平成30年)8月20日(月)10:00-16:00

場 所 ピアザ淡海 2階 204 会議室

参加者 23人

講 題:『「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」の実践と支援につながる評価』

講 師:同志社大学日本語・日本文化教育センター 准教授 櫻井 千穂 氏

### 1. DLA 概論 ※DLA=Dialogic Language Assessment(対話型アセスメント)

参加者が DLA についてどの程度知識があるのか、DLA 実践経験の有無、所属などを一人ひとり確認。→外国人児童生徒に関わっている参加者が多いが、DLA については初めて知った、知ってはいるものの実践経験はない等の参加者が多かった。



#### 【DLA を理解するために必要な理論】

①言語習得と滞在日数との関係

会話の流暢度(生活言語): 約 2 年

教科学習言語能力(学習言語) 8歳以前入国: 7-10年

8歳以降入国: 5-7年

子供は耳が良いため、生活に必要な言語能力は習得が早い

→学校の授業に必要な言語能力は別の話。入国時期が早いほど習得に時間かかる。

☆大人に向けての教授法では、子どもにとっては「何をしているかわからない」状態

→子どもには子どものための教授法が必要



②二言語相互依存説

第二言語の習得=母語で考え、思考する力と大きく関係している 母語の重要性

言葉の4技能のうち、「聞く」・「話す」・「読む」・「書く」の順に習得していく

→話す力を読む・書く力につなげる

### ③複数言語習得の要素

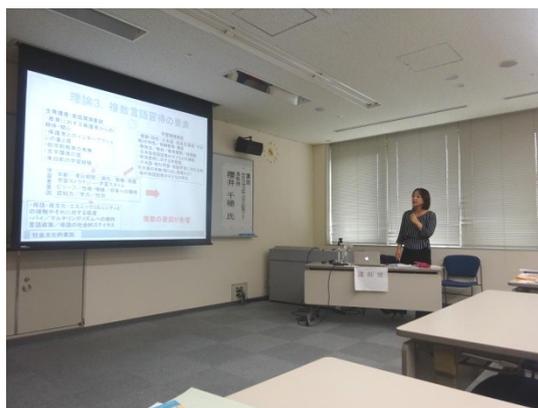
生育環境・家庭環境要因(親・兄弟との日本語使用状況など)

学習環境要因(母語使用の許容度など)

社会文化的要因(母語の社会的ステータスなど)

学習者要因(年齢、モチベーション、入国時期など)

→言語習得・アイデンティティの確立



### ④自尊感情を育てる学び

日本語ができない子ども

=2つのことばと文化を持つ可能性のある子ども

母語・母文化を財産にして学ぶ

経験の中で学ぶ

☆出来ないところを補うのではなく、出来るところをのばす教育

## 2. 授業の組み立て

・子どもの現状把握→中期目標の設定→長期目標の設定

☆「教科書の内容をそのまま教える」とは逆の発想

・DLAの実践映像視聴(話す・読む)

→映像の児童の話す・読む力分析

→具体的な指導方法検討

[話す・読む力分析](参加者の意見 一部)

・音読の特殊拍、区切り方

・体の動かし方(日本語の時は落ち着きがないが、母語の時は動きが止まる)

・母語では分かっているが、日本語では説明できない(理解と産出に差がある)

[指導方法検討](参加者の意見 一部)

・短い日本語の物語を母語に翻訳し、在籍クラスで発表

・読書が好き→読書教育に力を入れる

・日本人児童生徒に、日本語で母語を教える



・DLA の実践方法を学び、参加者ペアワーク(初めの一步+話す/読む)

☆テンポ良く進めるのが大事

児童生徒を飽きさせない



### 3. 外国人児童生徒の支援のポイント

#### ①在籍学級との連携

初級支援段階：在籍学級での居場所づくり

個別学習支援段階：予習型学習の連携 在籍学級への積極的参加を促す

支援付き自律学習段階：自立・自律学習を促す

#### ②読書指導(精読と多読)

レベルに合った本を継続的に読む

想像力を働かせることで、分からない単語も推測できる

#### ③母語母文化支援

プロジェクト型発表(母文化について在籍クラスでポスター発表など)

日本人児童生徒に日本語で母語を教える

トピックシラバスで楽しみながら学ぶ



参加者には、日本語ボランティア教室や県内の小中学校で日本語を教えていらっしゃる方が多かったが、講義中、共感の声や「なるほど」といった納得の声が多く聞こえてきた。また、ペアワークでは DLA の方式に少し戸惑いながらも講師の指導のもと、DLA の実践方法を体験されていた。理論から実践方法まで学ぶことができ、実際に外国人児童生徒に関わっている参加者にとって、非常に有益な講座になったのではないだろうか。この講義をきっかけに、DLA を実践する日本語指導者が増えるとともに、DLA がより認知されるようになることを願っている。